

# 新規追加キーワード 解説資料

河合塾 KALS(2023/2/14)

第6回公認心理師試験のブループリントで新たに追加されたキーワードの簡単な解説です。ぜひご活用ください（表記変更のみのキーワードは省略しています）

## □ 自伝的記憶・展望記憶・日常記憶 大項目⑦

・自伝的記憶とは、過去の出来事のうち、特に自分自身に関わる記憶のこと。純粋なエピソード記憶だけでなく、意味記憶に区分されるような自己知識も含まれる。

○特に、個人にとって重大な出来事（トラウマ的な体験など）や社会的に重大な出来事（大災害やテロなど）を目にした際、あたかもフラッシュを焚いて撮影したかのように、記憶が鮮明に残る場合がある。このような記憶をフラッシュ・バルブ記憶という。

○自伝的記憶は、必ずしも正確とは言えない。特に目撃証言に関しては、質問に含まれる誤情報により変容が起こることが報告されており（事後情報効果）、結果として偽りの記憶が形成されてしまう恐れがある。そのため、近年では司法面接など、正確な情報収集を目指す面接法が開発され、用いられるようになっている。

・展望記憶とは、将来行おうとする活動・予定の記憶のこと。例えば、家に帰ったら洗濯物を片付ける、週末に友人と会う、などが挙げられる。意図的な検索で思い出されるだけでなく、洗濯物を見つけて片付けるべきだったことに気づくなど、刺激が与えられることで検索されることもある。

・日常記憶とは、日常生活における記憶のことで、上記の自伝的記憶や展望記憶も含まれる。また日常生活の中で目にする物の名称や機能に関する記憶など、意味記憶も含まれる。

## □ 物体認知 大項目⑦

・物体認知に関する障害の例として、視界の半分が見えなくなる半側空間無視や、失認などが挙げられる。半側空間無視については赤本 2023 p144、失認については赤本 2023 p143 を参照。

## □ 言語学習理論 大項目⑧

・オーズベルは、与えられた刺激材料に含まれる概念を、既有知識に関連づけることによって学習が進行すると述べ、さらにその関連付けは主に言語によって媒介されると強調した。このことを有意味言語学習と言う。有意味言語学習という用語は、有意味受容学習（赤本 2023 p388）の中でも、第二言語の習得など、言語による媒介が強調される場合に用いられる。

・乳幼児期の言語獲得過程については、赤本 2023 p108 の表を参照。

## □ 社会語用論的アプローチ 大項目⑧

・語用論とは、文脈や話し手の意図や態度を含めて言葉の意味を理解することを指す。文脈から切り離し、純粋に言葉の意味に注目する意味論と対比される。

・グライスの会話の公理が基礎概念とされている。赤本 2023 p120 問 14 の解説を参照。

・ポライトネス理論とは、相手を配慮・尊重して行う対人コミュニケーションの方略に関する理論である。具体的には、話し相手が大切にしている立場や地位であるポジティブ・フェイスを尊重し（丁寧な言葉を用いるなど）、話し相手が触れてほしくない範囲であるネガティブ・フェイスに踏み入らないように会話を展開すること（婉曲表現を用いるなど）を指す。

## □ 主観的感情(feeling) 大項目⑨

・情動 (emotion) …急激に強く発生し、持続時間が短い。怒り・悲しみなど。

・気分 (mood) …弱いが、持続的に続く。いらいらしている、めそめそしているなど。

・感情 (affect) …痛みや疲れ、満腹感や空腹感などの快不快を伴う感覚経験のこと。

・主観的感情 (feeling) …affect に喜怒哀楽などの情動概念がラベリングされた心的状態のこと。赤本 2023 p124 「心理構成主義」も参照。

## □ 末梢神経説, 中枢神経説, 二要因理論 大項目⑨

・末梢神経説 (末梢起源説), 中枢神経説 (中枢起源説) については、赤本 2023 の p124 「感情に関する神経科学」を参照。

・二要因理論については、赤本 2023 の p125 「感情と表出行動, 感情と認知」を参照。

## □ ソマティック・マーカー仮説 大項目⑨

・赤本 2023 p125 「感情の機能」を参照。

## □ 表情知覚 大項目⑨

・顔や表情を認知する際、上下が逆転した倒立状態の顔が提示されると、認識が困難になることが知られている。これを倒立効果という。顔や表情認知においては、目や鼻・口などの個々の特徴自体よりも、それらが統合された全体的情報が用いられており、倒立状態で提示されると、特徴間の空間把握が困難になると言われている。倒立効果の例として、イギリス元首相の顔写真を用いたサッチャー錯視が代表的。

## □ 感情の病理・障害 大項目⑨

・代表的なものに気分障害（うつ病・双極性障害）が挙げられる。  
・うつ病は、本来は浮き沈みするはずの気分が、沈んだ状態で持続してしまう病態を指す。  
双極性障害は、気分の浮き沈みが激しく変動してしまう病態を指す。詳細は、赤本 2023 p504 「気分（感情）障害」を参照。

## □ 感情知性 大項目⑨

・自分自身の感情をうまくコントロールし、思考や行動に活かす能力のこと。情動知性、情動知能、あるいは知能指数（IQ）と対比させる形でEQ（Emotional Intelligence Quotient）と呼ばれることもある。

・構成要素は、以下の4つからなる。

- ① 情動の知覚：自他の情動を同定し、正確に表現する能力
- ② 情動による思考の促進：判断や記憶の助けとなる情動を生み出す能力
- ③ 情動の理解：情動の持つ特性や状況との結びつき、複雑な情動を理解する能力
- ④ 情動の管理：望ましい結果に向けて、自他の情動を効果的に調整する能力

## □ ポジティブ感情(拡張—形成理論) 大項目⑨

・ポジティブ心理学者のフレデリクソンは、ポジティブ感情が思考や行動を拡張し、利用できる資源や能力を形成していくという拡張—形成理論を提唱した。この理論は、ポジティブ心理学の基礎理論となっている。

・フレデリクソンは、ポジティブ感情とネガティブ感情の比率が3：1になることが、よいパフォーマンスを発揮することにつながると述べている。(ネガティブ感情がゼロになることが良いわけではない)

## □ ストレス脆弱性, レジリエンス 大項目⑨

・ストレスマネジメントにおいては、以下の3つの概念が代表的である。

- ① ハーディネス/ヴァルネラビリティ…ストレスに対する頑健性および脆弱性。ハーディネスであることはストレスの影響を受けにくく、ヴァルネラビリティであることはストレスの影響を受けやすい。
- ② レジリエンス…ストレスに対する回復力, 柔軟性。レジリエンスが高い人は、ストレス刺激の影響を受けても回復しやすく、立ち直ることができる。
- ③ センス・オブ・コヒアランス…ストレスに対する首尾一貫感覚。把握可能感, 処理可能感, 有意味感の3つからなり、ストレス刺激を把握して、処理して、意味を見出すことで自らの成長に繋げていく。

## □ 自尊感情(self-esteem) 大項目⑨

・自分自身に対する肯定感のこと。他者と比較して生じる優越性ではなく、自分自身を受け入れることによって生じる自己受容の感覚を指すことが多い。

・自己愛は、自己評価を高めることや維持することに対する欲求を含む点で、自尊感情とは区別される。

・ジェームズは、自尊感情=成功÷要求水準という公式で説明している。つまり成功体験だけでなく、要求水準を下げることによって自尊感情は高められると考えられている。

・ローゼンバーグの自尊感情尺度が測定に用いられることが多い。

## □ 6因子モデル(HEXACO) 大項目⑨

・2000 年前後から「ビッグ・ファイブモデルでは捉えきれない、第6の因子が存在するのではないか」という話題が、パーソナリティ心理学の世界で扱われるようになった。

・第6の因子の名は、“正直さ-謙虚さ”(Honesty-Humility：以下、H因子)。H因子は、以下の3つの社会的に望ましくないパーソナリティ傾向(ダーク・トライアド)と関連している点でも注目されている。

マキャベリアニズム…自身の利益のために手段を選ばない傾向。

サイコパシー…冷淡な感情と反社会性、他の人々の痛みを感じにくい傾向。

ナルシシズム…自身に対する誇大感をもち、それを他者にも強要する傾向。

・ビッグ・ファイブに、H因子を加えたモデルはHEXACOモデルと呼ばれている。

### 【HEXACOモデル】

Honesty-Humility	正直さ-謙虚さ	正直, 誠意, 公正, 忠実, 倫理的
Emotionality	情緒性(神経症傾向)	不安, 敵意, 抑うつ, 自意識, 衝動性, 傷つきやすさ
eXtraversion	外向性	活動性, 刺激希求性
Agreeableness	調和性	信頼, 実直さ, 慎み深さ, 優しさ
Conscientiousness	誠実性	秩序, 達成追求, 自己鍛錬, 慎重さ
Openness	開放性	空想, 審美性, アイディア

## □ 内集団, 外集団 大項目⑩

・自身の所属集団を内集団, そうではない集団を外集団という。

・内集団と自己の同一視から自己高揚動機に基づき、内集団に対する肯定的評価が形成されやすいことを内集団ひいき(内集団バイアス)という。対して外集団は、無個性な集団で価値が低いという評価がなされやすいことを外集団差別(外集団均質化)という。

## □ ステレオタイプ, メタステレオタイプ 大項目⑪

・ステレオタイプとは、特定の属性または社会集団の成員に対して認知している特徴のこと。ステレオタイプに基づく予期形成や、ステレオタイプに合致した情報への注目・記憶想起の促進などの機能を果たす。認知資源の節約や効率的な行動に寄与するが、その反面、差別や偏見のもとになりやすい。

・フィスクらのステレオタイプ内容モデルによれば、ステレオタイプは、能力次元と人柄次元の2次元で分類可能である。外集団に形成されやすいステレオタイプは「仕事はできても、

人間味がない」「仕事はできないが、人間味がある」といった相補的な特徴が形成されやすく、単純な否定でないが故に利用されやすい。

・メタステレオタイプとは、自集団（内集団）が外集団からどのようにみられているかを表す認知のことである。ネガティブなメタステレオタイプは、外集団から偏見の目を向けられているという不安につながるため、ステレオタイプ以上に集団間の関係構築の障壁となる可能性が指摘されている。

## □ 対人魅力, 自己呈示・自己開示, 社会的交換 大項目⑪

・対人魅力, 社会的交換は, 赤本 2023 p157「親密な人間関係」を参照。  
・自己呈示とは自分のことをよく見せようとする主張的な言語表現のこと。自己開示とは, 自分のありのままを伝えようとする言語的表現のこと。なお自己呈示ではなく, 相互の交換的な自己開示によって関係性が深まっていくことは, 社会的浸透理論と呼ばれている。

## □ 協力と競争・援助と攻撃 大項目⑪

・赤本 2023 p156「個人内過程, 集団過程」の集団間情動理論や脱カテゴリー化, p160「対人行動, 対人的相互作用」を参照。

## □ キャリア発達 大項目⑫

・赤本 2023 p390「進路指導・キャリアガイダンス」を参照。

## □ 可視的差異 大項目⑫

・可視的差異（可視的変形）とは, 他者から観察可能な他者との身体的差異のこと。  
・先天性のもので代表的な可視的差異が口唇裂（こうしんれつ：上唇が割れている等）・口蓋裂（こうがいれつ：口の中の天井である口蓋に裂け目があり, 鼻への異常な通路ができている等）で, 400人から600人に1人の割合で出生すると言われている。  
・後天的なもので代表的な可視的差異が火傷である。  
・赤本 2023 p226 問 19 およびその解説も参照。

## □ 社会情動的選択性理論, 老年期超越 大項目⑫

・赤本 2023 p346「こころの加齢モデル」を参照。

## □ 医療安全・感染対策 大項目①⑥

・赤本 2023 p309「患者安全」を参照。

## □ 妊娠・育児・出産 大項目①⑥

・赤本 2023 p181「恋愛・結婚・家族形成」、p184「早産」「低出生体重児」、p350「包括的アセスメント・リスクアセスメント」を参照。

・マタニティ・ブルーは産後数日後、一時的に現われてすぐに消える軽い気分の変化であることに對し、産後うつ病は中等度から重度の症状が2週間以上認められる点で異なる。

・2015～16年の2年間に妊娠中や産後1年未満に自殺した女性は全国で102人おり、妊産婦死亡原因の1位となった。そのため、産前・産後うつ病の早期発見・早期支援が求められる。代表的なスクリーニングテストとして、エジンバラ産後うつ病質問票（EPDS）が挙げられる。

## □ 被災者の心身の反応、被災者への支援 大項目①⑥

・被災者の心身の反応として代表的なものに、急性ストレス障害が挙げられる。症状は侵入症状、回避症状、陰性気分、覚醒症状、解離症状の5領域があり、3日～1ヶ月持続している場合に診断される（1ヶ月を超えて持続する場合、診断名はPTSDとなる）。侵入症状～覚醒症状についてはPTSDと同様（赤本 2023 p347を参照）。解離症状は、他者の視点から自分を見ているような離人感や、物事を呆然と眺めている現実感消失、被災体験を思い出せない解離性健忘が代表的。

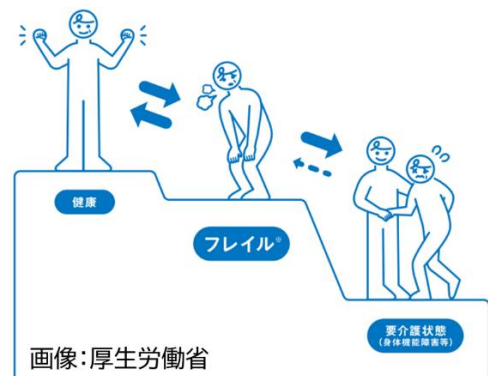
・被災者への支援は、赤本 2023 p311「心理的応急処置」を参照。

## □ フレイル 大項目①⑦

・加齢に伴う体やこころのはたらき、社会的繋がりが弱くなった衰弱状態。身体的フレイル、心理的フレイル、社会的フレイルに分類できる。

・フレイルは、健康と要介護状態の中間状態とされており、要介護状態に移行する可能性がある。

・フレイル予防の3つの柱として、栄養、社会参加、身体活動が挙げられる。しかし、コロナ禍における外出自粛生活の長期化がフレイル予防の困難さにつながり、高齢者の孤立、食生活の乱れ・偏りによるフレイル状態の悪化が指摘されている。



## □ 外国籍の子ども 大項目⑰

・何が出題されるかは未知数ではあるが、赤本 2023 p541「ハーグ条約」は知識としておさえておきたい。

## □ 権利擁護・アドボカシー 大項目⑰

・アドボカシー（権利擁護）とは、権利を主張することが困難な者の権利や意思を援助者が代弁することで、その者たちの権利や意思を守ること。また、権利や意思を守るための仕組みや制度作り、支援組織や政策決定者への提言もアドボカシーに含まれる。

・赤本 2023 p227 問 22 も参照。

## □ エコロジカルモデル<生態学的モデル> 大項目⑰

・個人と生活環境の相互作用に注目し働きかけていくことを目指すモデル。個人と環境を分断せず、全体として捉えていくことが特徴。

・個人を弱者とみなすのではなく、個人が積極的に環境に働きかけていくためのエンパワメントを高めていくと同時に、当事者同士のネットワークの形成や福祉制度の設計など、個人が資源を活用しやすい環境づくりも目指していく。

## □ リービングケア 大項目⑰

・児童養護施設などの施設を退所するまで期間に行われる支援のこと。新生活の生活用品等の準備、一人暮らしの練習、職業体験など、環境の大きな変化に対応するための支援が行われる。

・他には、施設入所前の準備であるアドミッションケア、入所後の生活を支援するインケア、施設を退所した後の支援であるアフターケアがある。

## □ 教職員のメンタルヘルス 大項目⑱

・以下、文部科学省「教職員のメンタルヘルス対策について（平成 25 年）」に基づく。

・教職員の精神疾患による病気休職者は依然として増加傾向にある。教員の病気休職者は、年代別では 40 歳以上が多く、学校種別では中学校・特別支援学校が多い。精神疾患を理由とする離職教員数は、病気を理由とした依願退職者の約 9 割を占める。また、精神疾患による休職職員の約半数は、所属校配置後 2 年以内に休職している。

・教職員のメンタルヘルス不調の背景として、業務量増加や教育の質を確保の困難化、教諭



間の残業時間のばらつき、校長等とその他の教職員との間の認識ギャップ等が挙げられている。

・予防的取組として、教職員本人の「セルフケア」の促進とともに、校長・副校長・教頭・主幹教諭等の「ラインによるケア」の充実の必要性や、役割明確化、業務縮減・効率化、相談体制の整備、良好な職場環境・雰囲気の醸成を図ることの必要性が挙げられている。

・精神疾患の再発を重ねるほど短期間に再発する可能性が高くなることから、最初の復職支援が重要とされている。また、復職後の再発を防止するため、適切な経過観察、日頃からの職場の雰囲気づくり、校務分掌（学校運営における業務分担）上の配慮、体制整備・充実が必要である。

#### <参考資料>



文部科学省 教職員のメンタルヘルス対策検討会議の最終まとめについて  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/088/houkoku/1332639.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/088/houkoku/1332639.htm)

## □ 各種処遇プログラム 大項目⑱

・赤本 2023 p439 「非行・犯罪のアセスメント」「施設内処遇と社会内処遇」参照。

## □ 教育機会確保法 大項目㉓

・正式名：義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律  
・2017年より施行された法律。法律名は教育機会確保法とされているが、条文の中には不登校児童生徒の定義や、その不登校児童生徒に関する教育機会の確保が明記されていることから、教育機会確保法は「不登校対策法」としての意味合いが強い。

・従来の不登校支援は復学支援が主であったが、教育機会確保法では復学支援に限らず、休養の必要性や、フリースクールや教育支援センター（適応指導教室）、不登校特例校など、学校以外の多様な学習活動を認める方向に転換している。

（参考）教育機会確保法 第十三条 国及び地方公共団体は、不登校児童生徒が学校以外の場において行う多様で適切な学習活動の重要性に鑑み、個々の不登校児童生徒の休養の必要性を踏まえ、当該不登校児童生徒の状況に応じた学習活動が行われることとなるよう、当該不登校児童生徒及びその保護者（学校教育法第十六条に規定する保護者をいう。）に対する必要な情報の提供、助言その他の支援を行うために必要な措置を講ずるものとする。